

「学校の意義」に関する教材研究

—教育をめぐる思想・歴史の視点から—

加藤 詔士（法学部・教授）

1. はじめに

いま学校が大きく変わりつつある。信頼性の低下が進むなか、その在り方についての検討が続けられ、具体的な改善方策がくりかえし提案されるに至っている。

たとえば、平成25（2013）年12月の中央教育審議会答申『今後の地方教育行政の在り方について』では学校の組織運営について検討され、学校の自主性・自立性の確立ならびに特色ある学校づくりの実現のための施策が進められた。

また、グローバル化や情報化の急速な進展、ならびに子どもをとりまく複雑化・困難化した課題に的確な対応をするため、「教職員に加えて、多様な背景を有する人材が各々の専門性に応じて、学校運営に参加することにより、学校の教育力・組織力を、より効果的に高めていくことがこれからの時代には不可欠である」という認識に至っている。それに応じて、平成27（2015）年12月には、中央教育審議会から『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について』という答申が示された。学校の在り方を考えるにあたっては、学校と家庭ならびに地域社会との関係も視野に入れることが必要であることから、同じ平成27（2015）年12月、『新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について』という答申もまとめられた。

新しい時代に求められる学校の在り方をめぐって推進されている以上のような改革は、教職課程の授業において当然取りあげるべき主題となる。「教育原論」という授業科目においても、教育の基本理念、子どもの心身の発達と学習の過程、教師の役割と職務などとともに、学校、とりわけ現代の学校の現状と改革は取りあげるべき必須の主題となる。

2. 「教育原論」の構成と内容

（一）

「教育原論」という授業は、「教育職員免許法施行規則に定める区分」一覧によると、主に「教育の基礎理論に関する科目」のうち「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」を扱う科目と位置づけられている。

「教育の基礎理論に関する科目」としては、この（1）「教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想」とともに、（2）「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程（障害のある幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程を含む）」、ならびに（3）「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」が含まれる。本学ではこれに対応する授業科目として、（1）「教育原論」「学校と教育の歴史」、（2）「教育心理学」「発達心理学」、（3）「教育制度論」「教育社会学」をそれぞれ開設している。

以上のような「教育職員免許法施行規則に

定める区分」一覧、ならびに本学で開設している授業科目に鑑み、筆者は「教育原論」の授業を担当するにあたり、その構成と内容をおおよそ下記のように構想している。

- ①教育の意義 (1) 教育の語義・概念
- ②教育の意義 (2) 教育と人間発達
- ③教育と社会 (1) 教育と社会化
- ④教育と社会 (2) 人間一年早産説
- ⑤教育と社会 (3) 野生児
- ⑥学校 (1) 学校の誕生と普及
- ⑦学校 (2) 近代学校の成立と変容
- ⑧学校 (3) 現代学校の改革
- ⑨教育の思想 (1) 教養主義・人文主義
- ⑩教育の思想 (2) 子ども中心主義思想
- ⑪教育の思想 (3) 近代公教育思想
- ⑫学校・教育の革新 (1) 座席
- ⑬学校・教育の革新 (2) 黒板
- ⑭学校・教育の革新 (3) 掃除
- ⑮まとめ－学校・教師・子ども－

本稿は、この「教育原論」において取りあげるべき「学校」という主題、そのなかでもとくに「学校の意義」について理解を深めさせる教材を紹介し検討する。

(二)

「教育原論」のなかで、「学校」という主題をめぐる講義の内容を構想するさい、念頭に置いたことがある。第一に、教員養成学部あるいは教育学部ではなく、本学のような一般大学の教職課程における「教育原論」として開設されていること、しかも第二に、「教育原論」は教職課程を履修しはじめる最初の学

期から履修可能な科目として位置づけられていること、第三に、本学教職課程では「学校と教育の歴史」「教育社会学」「教育制度論」という授業科目も、「教育の基礎理論に関する科目」として開設されていること、第四に、前記のように、平成27年12月21日に、中央教育審議会から答申『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について』が出されたこと、しかも同答申ではあらたな学校像ならびに教師の環境整備が提示されていることである。

このようなことを念頭に、「学校」という単元における講義については、試行錯誤のすえ、下記のような構成と内容を構想した。

- (1) 学校の誕生と普及
- (2) 現代の学校につながる近代学校の成立・変容・改革
- (3) 現代学校の現状と改革

(1) では学校の意義、特質、機能と役割、(2) では近代社会の特色、近代学校教育の普及と基本的性格、現代社会における学校の変容、(3) では現代学校とその教育環境の変化、現代日本の学校教育の現状と課題、「新しい学校」「開かれた学校」づくり、「チーム学校」構想による学校改革を、それぞれ主要な講義項目とした。

平成27(2015)年12月には、前記のように、学校のあり方にかかわる二つの中央教育審議会答申が出されたのであるから、これからの教師に対してはこれについても講義すべき項目となる。その内容と方向性は、教育再生実行委員会における論議等を通じて知られており、これまで講義のなかで言及してきたけれ

ども、とくに答申『チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について』は学校の現状と課題が総括され、しかも今後の方向性（「チームとしての学校像」ならびにそれを実現するための3つの視点）が具体的に示されているだけに、「学校」という主題をめぐる講義のまとめのなかで取りあげるにふさわしい項目と考えられる。

なお、「学校の意義」をめぐる講義というなら、学校の機能と役割（社会化、選抜と配分とその正当化）、あるいは学校の特質（家庭教育・社会教育との異同、生涯教育との対比）についても取りあげるべき事項と考えられるが、これらについては別に「学校の機能と役割」ならびに「学校の特質」という項目を特設して講じた。

以上に鑑み、一般大学の教職課程における講義であるだけに、講義の内容も説明素材についても、専門的にならずできるだけ具体的に身近に感じられる教材がふさわしいと考えられる。身近な教材といっても、日本だけでなく海外の、現在と過去における学校の意義を、しかも先進国だけでなく発展途上国における学校の意義についても理解を深めさせる教材を用意し、どこでもいつでも学校は意義あるものであることについて理解させることを期した。

このようなことを思量し、「学校の意義」をめぐる教材として、下記の5点を用意した。

- 1) 漫画『サザエさん』のなかの学校
- 2) 「米百俵」の故事
- 3) シャーロック・ホームズ物語のなかの学校
- 4) トニー・ブレア首相「優れた教育は

第二のパスポート」

- 5) マララ・ユスフザイ「教育こそ最強」
- 以下、順にその概要を記す。

3. 「学校の意義」をめぐる教材

1) 漫画『サザエさん』のなかの学校

(一)

いま学校への信頼が揺らいでいる。不登校とか学校病理とかいう現代用語も生まれている。

かつて学校は今以上に信頼され尊敬される対象であった。「登校」あるいは「下校」という漢字表記に象徴されているように、学校は仰ぎ見るような高みにあって、人びとの日常生活のなかにしっかり位置づいていた。それだけに、小説はもちろん、漫画やアニメにも頻繁に取りあげられている。昭和の国民的漫画『サザエさん』においても、学校に関わる話題がしばしば取りあげられている。学校は磯野家の生活のなかにしっかり位置づいていた。

漫画『サザエさん』は、戦後日本の庶民生活のなかの笑いや哀歓を描いた国民的な家庭漫画である。国語辞典の見出し語に採用されているほどである。『広辞苑』の場合、最新版（第6版、2008）ではじめて採用され、次のように説明されている⁽¹⁾。

さざえさん【サザエさん】長谷川町子原作の漫画。一九四六年（昭和二一）から夕刊フクニチで、五一年からは朝日新聞で連載。三世代同居家庭の主婦サザエさんを中心に庶民の暮しをユーモラスに描く。のちテレビ・アニメ化。

連載は昭和21（1946）年から昭和49（1974）年までだから、実に30年近くも、戦後日本の「庶民の暮らし」が取りあげられている。いわゆるストーリー漫画ではなく、比較的独立したエピソードから成る。取りあげられるトピックスは時代背景を象徴するものが少なくない。しかも、日々の暮らしのなかの出来事が戦後史とからめて描かれているから、歴史的・社会史的素材として貴重である。のちに単行本にまとめられ、全68巻を数える⁽²⁾。

漫画『サザエさん』が学校の意義を考える教材となりうる理由の第一は、学校をめぐるトピックスが何度も取りあげられていることである。学校が人びとの生活のなかにしっかり位置づいていることのあらわれであって、その時々学校教育で話題になったであろうことが取りあげられている。その内容は時代を象徴するものが少なくない。

第二に磯野家の人びとは歳をとらず、いつまでもカツオは小学校5年生、ワカメは小学校2年生という設定だから、時代の変化のなかで学校の変貌、学校の出来事の移り変わりがはっきり分かる。終戦直後から30年近くの間の、子どもを取り巻く学校や家庭の生活ならびに地域環境の変化を、「定点観測」することができる⁽³⁾。

漫画では、カツオとワカメは毎朝、玄関を出ると門を右に折れて学校にむかう。公立の小学校である。友達の家立ち寄り誘い合わせて学校へ行くけれども、集団登校ではないであろう。

しかし、時代が変貌するなか、二人の学校生活にも変化があらわれる。まず、二人は転

校している。戦後の経済成長にともないサラリーマンの転勤が増えるなか、磯野家も父親のマスオの勤務地が九州から東京へ変わることになり、それにともないカツオとワカメは東京の学校へ転校した。九州の学校は木造建築であったが、東京の学校は3階建以上の鉄筋校舎であった。教育設備も充実していた。立派な設備をもち、きれいな化学実験室や50メートル・プールも備わっていた（第62巻、第61巻）。学校の施設設備の充実ぶりが分かる。

また、東京の学校は高層の校舎になるが、安全対策が万全でなかったのか、「カツオが教室の窓際でボール遊びをしているときに、友達が2階の窓から落っこちてしまった。幸いなことにその子は肥満児だったので、窓の下にあったバスケット・ゴールに引っ掛かって一命をとりとめた」という場面が描かれている（第53巻）⁽⁴⁾。校舎建築の高層化にともない転落などの学校事故がおこるようになったであろうこと、また戦後しばらくすると子どもの肥満という問題もおこってきたなか、取りあげられたであろうと考えられる。『サザエさん』では、そうした学校の変容、子どもの変化が巧みに取りあげられたのである。

もう一つ、彼らの学校は特別活動（教科外活動）が盛んであって、学芸会あるいは修学旅行が重視されている。修学旅行では、カツオは5年生のとき広島に行っている（第56巻）。一方、学芸会ではお婆さん、たぬき、一休さんなどの役を演じた（第26巻、第29巻、第45巻）。ワカメがおばあさん役のときカツオが相手役のおじいさん役を演じたこともあつ

た(第26巻)⁽⁵⁾のだから、これは、学年や学級の枠を超えたオープン・エデュケーションがすでに取り入れられていたことになる。

国民的な漫画『サザエさん』に描かれているように、学校は戦後の人びとの生活のなかに大きく位置づけられていたのである。

なお、学校生活だけでなく、家庭や地域での生活についても変化の諸相が描かれている。当初、カツオの生活のなかには勉強、遊び、労働が「バランスよく重なり合って存在した」が、やがて1960年代から、とくに昭和45(1970)年の大阪万博を過ぎるころから受験戦争が登場しはじめ、「外遊びよりも家の中でテレビを見たりしている場面が目につくようになる。家事手伝いはあいかわらずやっているが、お祭りなど地域行事や近所づき合いでの出番は減っていく」。その代わり「受験戦争を示す話題がひんばんに登場する」。越境入学、塾通いなどといった話題である。カツオの場合は、家庭教師がつけられたり(第37巻)、塾をサボってサザエさんに叱られたり(第51巻)といったことが取りあげられている⁽⁶⁾。

(二)

漫画『サザエさん』のなかの学校は戦後の小学校である。中学校の、それも現代の中学校を舞台にした漫画『鈴木先生』もまた、学校について関心を持たせその意義を考えさせる格好の教材になる。『サザエさん』と同じようにごく普通の、中学校教師の視点から描かれているからである。日本で数多い「鈴木」という名字を題目にしていることが象徴しているように、普通の中学校教師の日常が描か

れている。

この漫画『鈴木先生』は平成17(2005)年6月7日号から平成23(2011)年1月18日号まで雑誌『漫画アクション』に連載され、現代の、21世紀はじめの中学校が舞台である。のちに単行本にまとめられ、全11巻となって刊行された⁽⁷⁾。平成23(2011)年4月25日からテレビドラマ化されたが、そのときのキャッチコピーは「誰も正解を教えてくれない。それが学校だ」であった。

鈴木先生は問題を抱える生徒を愛と情熱をもって救う熱血先生ではなく、ごく普通の教師である。鬱屈したものをいっぱい抱えこみ、日々自問しながら生徒を指導するあり方を模索している、悩み多き中学校教師である。先生が生徒に恋心をもつシーンもある。それだけにリアルさがある。

鈴木先生は中学校2年A組の担任で、国語の教師である。図書委員会の顧問でもある。最初は独身、やがて結婚するが「さずかり婚」であった。

鈴木先生はクラスの席決め、給食のおかずの取り分け、思春期の子ども性のことなど、日常的な問題を相手に格闘する。しかし、熱血指導ではない。地道な指導を真摯に続け、何事も生徒自身が納得するまでよく考えさせて行動できるように導びこうとする、そんな教師である。望ましい教師像を形成するさいに参考になるであろう。

2)「米百俵」の故事

(一)

「米百俵」の故事とは、戊辰戦争で窮乏し

た長岡藩がその窮状を見かねた支藩から届いた米百俵を売却した金で学校を建て、人材を育成しようとした故事である。

長岡藩は戊辰戦争のさい奥羽越同盟に加わり戦ったが、官軍の前に落城し焦土と化した。藩主が帰順を願い出て取り潰しは免れたけれども、禄高は7万5千石から2万4千石になったことで、藩士の家庭は食事にも事欠くことになった。武士の体面など維持できないほど困窮した。そのなか、明治3（1870）年春、支藩の三根山藩から米百俵の支援が届いた。長岡藩の大参事小林虎三郎（1828－1877）はその米を売却した代金をもとに学校を建て、人材を育成することで藩の立て直しをすることを企図した。藩の首脳も小林の意見を容れて米を分配することはしなかった。藩士はこれに怒って小林邸へ乗りこみ、抜刀して米百俵の分配を迫った⁽⁸⁾。

このような故事を山本有三（1887－1974）が戯曲『米百俵』に仕立てあげ、昭和18（1943）年に上演された。その後、教科書『小学校国語』（日本書籍、1965）の教材に採用される⁽⁹⁾。平成13（2001）年の5月になると、小泉純一郎首相が最初の所信表明演説のなかで、「今の痛みを耐えて明日を良くしようという『米百俵の精神』こそ、改革を進めようとする今日の我々に必要ではないでしょうか」と米百俵の故事を引用し、「新世紀を迎え、日本が希望に満ち溢れた未来を創造できるか否かは、国民一人ひとりの、改革に立ち向かう志と決意にかかっています」と訴えた⁽¹⁰⁾ことで現代によみがえり、同年7月に新潮社から再版本が出版された⁽¹¹⁾。「米百俵」は「骨太

の方針」「聖域なき改革」などとともに同年度の新語・流行語大賞の年間大賞を受賞した。歌舞伎にも仕立てられる⁽¹²⁾など、広く知られるようになった。

「米百俵」の精神は、海外でも評価され受けつがれている。ドナルド・キーン（Donald Keene、1922－）の翻訳により英語版『*One Hundred Sacks of Rice*』が刊行されたことがきっかけで、海外に広まった。中米のホンジュラス共和国の場合は、スペイン語劇「米百俵」が各地で公演されたし、日本の政府開発援助（ODA）による学校整備プロジェクトで、全国に「米百俵学校」と名づけられた公立小中学校の新築や増改築が進み、これまでに120校を超えた。目標の100校を突破したことの記念式典が、2017年3月、東京で開催された⁽¹³⁾。

（二）

講義では、この山本有三『米百俵』（新潮文庫、2001）を素材に用い、支援として届いた米百俵の配分を求めて小林虎三郎大参事宅に押しかけた藩士たちと小林大参事との応酬の場面から、資料を作成した。とりわけ百俵の米をもとに学校を建て、学問をおこし人物を養成すれば「後年には一万俵、百万俵になるか、はかり知れない」と考える小林大参事のせりふは、「教育は国家百年の計」を象徴するということに着目して、資料①のような教材を作成した。

同教材を活用するさい、時代背景、物語の概要についての説明とともに、学習主題である学校の意義、教育の意義を説いている箇所を確認させることで、関心を喚起した。

「米百俵」の故事の意義を説くには、「米百俵」のその後についても当然言及すべきである。第一は、米百俵の売却金をもとに「国漢学校」が開校され、やがて坂之上小学校、旧制長岡中学校の設立に至ったこと、ここから小金井良精（1859-1944）、小野塚喜平次（1872-1944）、山本五十六（1884-1943）などの逸材が生まれたという史実である。人材の育成策として、学校の開設とともに、育英事業の充実ならびに医術修業のための長崎への内地留学が奨励されたことも特筆される。

第二は、輩出された逸材をめぐる紹介である。逸材の輩出は学校教育の成果を具体的に物語るけれども、逸材たちの生涯にも教育上示唆に富む生き方が含まれているだけに注目される。なかには自己の体験にもとづいた名言、とくに人材の育成ならびにチームの組織化という教師教育に有益な、心にしみる名言が残されている場合があるのだから、これらを教材化することが望まれる。

前出の逸材のなかでは、山本五十六が部下の育成や組織の指導者としての体験にもとづいて数々の名言を残していることで知られている。とりわけ「やってみせ、言って聞かせて させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ。話し合い 耳を傾け 承認し 任せてやらねば 人は育たず。やっている姿を感謝で見守って 信頼せねば 人は実らず」という名言は、人を育てるためのマネジメントスキルとして多くの示唆に富んでいる。人あるいはチームを動かすコーチングのすべてが網羅されている。しかも、コミュニケーション能力（話し合い、傾聴）ならびに人にまかせる

マネジメント力（承認、委任）もまた人材の育成や組織の成長を促すうえで必要不可欠であるということが、簡潔に言い表されている。教師教育における名言の一つとして、いつも心にとどめおきたいものである。

教材「米百俵」の故事を活用して学校の意義、教育の意義を説明するとき、もう一つ補説すべきことがある。米百俵の故事はけっして虎三郎個人の先駆的な英断で誕生した訳ではなかったという史実である。「その歴史的な本質は、逆賊となった長岡藩が、忠誠の証として維新政府の求める教育政策を誠実に履行することにあつた」。長岡藩は維新政府に抗して惨敗しただけに、虎三郎たち長岡藩首脳は国民皆学を旨とする学校教育の普及という「維新政府の御意向を真摯に受け止め」、その教育政策を忠実に履行しようとしたのであつた。このような史実をもとに、「米百俵」という物語に仕立てられたということである⁽¹⁴⁾。

3) シャーロック・ホームズ物語のなかの学校

(一)

英国の探偵小説で、A. C. ドイル(Arthur Conan Doyle, 1859-1930) 作シャーロック・ホームズ物語には、学校がしばしば登場している。『海軍条約文書事件 (*The Adventure of the Naval Treaty*)』(1893) という短編小説の場合は、公立の小学校を「灯台だよ。未来を照らす灯だ。」とホームズに語らせ、学校の意義に言及している。

依頼された事件を解決し終えてロンドン郊外から鉄道で帰る途中、クラップム・コモン

駅近くでのこと。近隣の屋根に比べて一際高くそびえ立つ建物をみつけたホームズに、次のように語らせている⁽¹⁵⁾。

・・・まもなく、私たちは疾走するポーツマス線の車中の人となった。ホームズは深く物思いに沈みこみ、クラパム乗換駅を過ぎるころまでは、ほとんど口を開かなかつた。

「こんなふうに家々を見おろしながら、高架線でロンドンに入るのは、なかなか愉快なことだね」

あたりの眺めは、ごみごみしたものだったので冗談だろうと思っていると、ホームズがすぐに説明をはじめた。

「あの、スレートの屋根がつらなる上に、あちこちにそびえ立つ大きな建物を見たまえ。鉛色の海の上に浮かぶ、煉瓦の島みたいじゃないか」

「公立の小学校だよ」

「きみ、あれは灯台だよ。未来を照らす灯だ。ひとつひとつが、何百という輝かしい小さな種子をふくんでいる^{さや}萁なのさ。あの中から、より聡明な、そしてさらに優れた大英帝国がとびだしてくるんだ」

シャーロック・ホームズが活躍した19世紀末から20世紀初頭の英国といえば、大英帝国の栄華に陰りがみられ社会は沈滞^{しんたい}のみであった。そのなか、政府は競争相手国であるドイツやフランスにならい、学校教育の振興に関与し始めたころであった。イングランドとウ

エルズは1870（明治3）年に、スコットランドは1872（明治5）年に、最初の初等教育法を制定し学校教育の義務化に乗り出した。その1870年教育法で規定された公立の小学校を、ドイルは英国の「未来を照らす」灯台になると期待し、また「ひとつひとつが、何百という輝かしい小さな種子をふくんでいる^{さや}萁なのさ。あの中から、より聡明な、そしてさらに優れた大英帝国がとびだしてくるんだ」と、公立小学校の成果に大きな期待を寄せたのである。

1872（明治5）年という、日本ではちょうど「学制」が公布され義務教育が制度化された年である。英国は産業革命を世界に先駆けて成しとげ、世界の工場としての地位を築いてきたのだが、1851年ロンドン万国博覧会ならびに1867年パリ万国博覧会をきっかけに、競争相手国のプロシアやフランスの躍進に危機感を抱いたことから、両国のような国家による学校教育の制度化、ならびに学校教育形態での技術教育の組織化が国家的重要事であるという認識が高まってきた頃であった。学校教育に国が関与し始め政策課題として取り組むようになったのである。

作者のドイルは学校教育が早くから普及しているスコットランドのエディンバラの出身であるだけに、公立の小学校が設立されたことの意義に着目し、小説のなかで「未来を照らす灯台」あるいは「輝かしい小さな種子をふくんでいる^{さや}萁」と表現したと考えられる。ちなみに、同じ英国でも、スコットランドは、イングランドと違い、宗教改革のあとカルビニズムの理念にもとづいた教区学校制度が構

想され普及するなど、早くから学校教育が広まり国民の学習機会が開かれていた⁽¹⁶⁾。

(二)

シャーロック・ホームズ物語の作者A. C. ドイルは日本とも関係が深い⁽¹⁷⁾。とりわけ日本の英語教育との関係が注目される。

第一に、シャーロック・ホームズ物語は英語教育の教材としてしばしば使用されていることである。文章は平易で、歯切れがよくて読みやすい。ストーリーは簡潔で構想力に富むということで、評価が高い。明治から昭和初期までに発行された高校用の英語教科書では人気の教材であったし、今でも根強い人気である⁽¹⁸⁾。

第二に、この「コナン・ドイルの探偵小説を愛読し、大いにコナン・ドイルに私淑」ただけでなく、実際にドイルを訪ねて会談した英語教師がいたことである。その英語教師の「英文はおもにコナン・ドイルの感化を受けて居ると申して差支えなからう」といわれる。安藤貫一(1878-1925)といて、同氏の「本領は英文を書くことであり、この点ではまさに天才的であった。手本としたのはConan Doyleである」⁽¹⁹⁾。

安藤は鹿児島第一中学校(現在の鹿児島県立鶴丸高校)に勤務中の明治42(1909)年7月、島津久賢(1881-1926)男爵が洋行するとき案内役として随行した。滞英中の明治43(1910)年1月20日に、ロンドンのピカデリー・ホテルでドイルと会談している。安藤は夏目漱石の小説『吾輩は猫である』(1905)の4章までの英訳版『*I am a Cat*』を仕上げ、このとき、それを持参した。これらのことは「コ

ナン・ドイル先生を訪ふ」という訪問記にまとめ、英語・英文学研究雑誌『英語青年』に発表している⁽²⁰⁾。

第三に、英語教師ではないが、東京帝国大学のお雇い衛生工学教師W. K. バルトン(William Kinninmond Burton, 1856 - 1899)を介した、ドイルとの関わりも特筆される。工業化を進めていた明治日本は、コレラや赤痢などの伝染病の予防につながる近代的な水道の建設が急務と考え、水道施設の進んでいた英国のロンドンで技師として水道事業にたずさわっていたバルトンを招聘したものである。そのバルトンはドイルと同郷で幼なじみであり、バルトンはドイルに日本の見聞や情報を書き送って執筆を励ましていたということである。実際ドイルの小説には筆筒、甲冑、花瓶、柔術など「日本の事物がかなり出て来る」⁽²²⁾。

ドイルは、それに応えて『ガードルストーン商会(*The Firm of Girdlestone*)』(1890)をバルトンに献じている。「旧友、東京帝国大学教授ウィリアム・K・バートン氏に」と記されている⁽²³⁾。また、『空き家の冒険(*The Adventure of the Empty House*)』(1903)のなかで、ホームズが滝から落下しながら助かったのは「日本の格闘技、バリツ」の心得があったからだとして設定している⁽²⁴⁾。英国は対ロシア政策の一環として日本と同盟を締結した(1902年)こともあって、英国人の日本への関心は高まっていたという背景もあるであろう。

コナン・ドイルと日本との以上のような関わりについての話は、余話として興味を呼び

がちである。

4) トニー・ブレア首相「優れた教育は第二のパスポート」

(一)

英国の第73代首相トニー・ブレア（Anthony Charles Lynton Blair, 1953-）は、教育を国内改革の最優先課題としたことで知られる。1997（平成9）年5月に首相に就任する前の労働党大会における演説では、「政府の最優先課題を三つ挙げると尋ねてほしい。教育、教育、教育だ」といって喝采を浴びた。首相就任後の演説では「優れた教育を受ければ、それが『第二のパスポート』となり、知識を基盤にする社会を生き抜く強力な身分保証になる」と、国民にむけて訴えた⁽²⁵⁾。教育あるいは学校の意義を高唱した名言である。

第一の演説は、ブレア政権を財務相として支えたJ. G. ブラウン（James Gordon Brown, 1951-）氏による「子どもは人口の20パーセントだが、未来の100パーセントだ」という名言とともに知られている。第二の演説は、英国が実際は今なお身分制が根強く残る社会であるだけに大きな意味を持つ。学校で優れた教育を受け成績優良であれば身分や家柄に関わらず立身出世できるということ、またこれからの知識基盤社会では「強力な身分保証になる」ということは、国民にとって開かれた社会を展望する力強いメッセージになったにちがいない。まさに現代英国における学校の機能と役割を的確に表現している。

(二)

学校の意義、教育の意義を高唱したブレアの教育政策では、国民が常に学習し続け時代

の変化に追いついていくことができるよう、広く社会全体の学力向上が目ざされた。具体的には、政権1期目では初等教育段階における基礎学力の形成を重視し、「リテラシー・アワー」の義務化など、初等学校で読み書き計算能力を向上させるカリキュラム改革をおこなった。2期目以降は中等教育段階の改革に移行し、「将来の学習と就業に必要な核となる普遍的な学習・経験は保障し」つつ、「学校やカリキュラムの多様化と選択」の範囲を広げることが企図した。3期目の2005（平成17）年5月の議会では、「教育は現在も政府の最優先事項である」こと、政府は学校を選択と質が向上するような教育改革をおこない、すべての人びとの教育水準の改善をさらに発展させるという決意が述べられた⁽²⁶⁾。

ブレアの以上のような学校観と教育政策は、1970年代末以降における英国の教育改革のなかに位置づけてみると、その特色がよくわかる。

英国は手厚い福祉国家政策を長年続けてきたことから社会の大停滞を招いたが、そのなか1979（昭和54）年に誕生した保守党のサッチャー政権は、経済においても教育においても競争原理を導入した改革を押し進めた。その結果、経済自体は活気を取り戻しはじめたが、一方では、貧富の格差の拡大、若者の長期失業の増加、犯罪の増加が進み、学校間の競争による学校現場の疲労と萎縮が顕著になった⁽²⁷⁾。

ブレア政権は、この経済の活力を維持しつつ、貧困や格差の背景にある社会構造に目を向け、政府がこれに積極的に関与することで

悪循環を断ち切ることが必要と考えた。子育て支援、就労支援などといった自立支援策を打ち出したのである。M. H. サッチャー (Margaret Hilda Thatcher, 1925-2013) が貧困の一因は勤労意欲の減退にあると捉えて自助努力 (自助による自立救済) を促したのに対して、ブレアは競争社会の前提であるスタートラインを揃えて「機会の平等」を打ちだし、就労による自立を国民に求めた。教育レベルの低い、向上心に欠ける、労働熟練度の低い者には、まず何よりも知識とトレーニングが必要であり、そのための教育が重要になる。また、変化の激しい現代社会であるだけに、若者であれ年配者であれ母親であれ、変化に対応できる能力と心構えが必要になる。政府はそのための自立支援策を次々打ちだし教育機会を用意したのだった。たとえば、貧困者については、職業訓練をおこないスキルを身につけさせ、就労可能性を高めたうえで労働市場に送り出すことに重点がおかれた。学校教育の面では、初等教育段階においては基礎学力の向上を、中等教育段階では学習と教授の質を上げ学校やカリキュラムの選択の範囲を広げることで、将来の学習と就労の必要性に応えようとしたのである⁽²⁸⁾。

教育の再生が目ざされ格差社会が問題になっている日本には、ブレアの教育政策は示唆するところが少なくない。

5) マララ・ユスフザイ「教育こそ最強」

(一)

日本や英国のような先進国では、学校は国の政策課題を実現する重要な装置であり、個

人にとっては自助による自立救済の確かな手段であり強力な身分保証であった。それが発展途上国になると、学校にはまったく別の意義が認められる。無知、貧困、抑圧、テロなどと闘う唯一の解決策になるという意義である。

パキスタンの活動家で2014年度ノーベル平和賞を受賞したマララ・ユスフザイ (Malala Yousafzai, 1997-) の一連の活動には、発展途上国における学校の意義にかかわる発言が頻繁にみられる。発展途上国における子どもたちの劣悪な教育環境について告発し、すべての子どもに平等の教育機会が拡大するよう支援をという提言をするさい、学校の意義を知らしめる名言がいくつか見いだされる。

マララは、最初、2009 (平成21) 年に、自由に学校へ通えない日常を綴ったブログを匿名で始めた。やがて海外のメディアで「すべての子どもたちに教育を」と訴え続ける。それから、そのブログ「パキスタンの女子生徒の日記」を使い、地元のイスラム過激派による女子教育の抑圧を告発し女子が教育を受ける権利を訴え続けたことで、注目を浴びることになった。

2013 (平成25) 年の7月12日には国連に呼ばれ、総会会議場で演説した。女性の権利と女子の教育を中心に演説し、学校教育の重要性について世界に訴えかけた。テロリストは銃弾で私たちに黙らせようとしたが失敗した。すべてのテロリストや過激派の子どもたちにも教育を受けさせてほしい。「みんなが団結して教育を求めれば、世界は変えられます」。ペンと本を手にとろう。「知識という武器を持ちましょう」。それこそが最強の武器に

資料② マララ・ユスフザイのノーベル平和賞受賞演説（二〇一四年十二月）

なるとか、「ひとりの子ども、ひとりの教師、一冊の本、そして一本のペンが、世界を変えるのです。教育こそ、唯一の解決策です。まず、教育を。」という訴えは、広く共感を呼んだ⁽²⁹⁾。2014（平成26）年度には、それらの活動の継続と勇気に対しノーベル平和賞が授与された。同年12月10日のノーベル平和賞受賞演説においても、少女の教育の必要性や平和を訴えた⁽³⁰⁾。『わたしはマララー教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女-』、『マララ：教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』などの手記においても、学校の意義、教育の重要性を訴えている⁽³¹⁾。

以上のように、マララの発言ないし著作には学校の意義について理解を深めさせる素材が少なくない。筆者は、そのうちノーベル平和賞受賞演説について、資料②のような教材⁽³²⁾を作成した。2016（平成28）年度から中学校で使われている英語科、社会科、家庭科の教科書でもマララが取りあげられており⁽³³⁾、学校の意義にかかわる教材も含まれる。

資料②のノーベル平和賞受賞演説を活用して学校の意義を説明するとき、筆者は二つのことに気づかせるよう留意している。第一は、「私たちの未来はまさに教室にあった。私たちは一緒に座り、本を読み、学んだものでした。」「ひとりの子ども、ひとりの教師、一冊の本、そして1本のペンが世界を変えるので



す」⁽³⁴⁾ というように、学校に行くことは自分の未来を切り開き、やがては世界も変えられるという認識である。誰も彼も学校に通うわが国では、学校に行くことの意義を自覚することは少ないだけに、学校の「教師は子どもの未来に触れている」こと、「教師の前には子どもではなく未来である」ということを自覚させる、格好の素材になるように思われる。

第二は、知識を得ることで未来を開き世界を変えられるということだけでなく、学校で一緒に生活し学ぶということで「私たちは平等なのだ」という観念が体得されることの意

味である。マララは学校がもつこの意義を確かに認識している。10年後、20年後には何をしているかを尋ねられたとき、彼女は次のように応答している⁽³⁵⁾。

すべての子どもたちが学校に通っている姿を見てみたいです。それが私の望むことです。多くの学校を建て、この目で見てみたいです。学校に行くというのは、単に教室で本を読むことではなく、学ぶことを通じて、新しい世界と出会うことだと思います。大切なのは、友達と机や、いすを並べることで、みんな平等なのだと思ふことなのです。黒人でも白人でも、イスラム教徒でもヒンズー教徒でも、お金持ちでも貧しくても、そんなことは重要ではなく、私たちは平等なのだと教えてくれるのです。私は、それを実現するためにも政治家になりたいんです。

社会が不平等であっても、学校のなかで平等の観念を体得する機会があることは、子どもたちに異なる価値原理を気づかせることになる。明治初頭の日本の小学校がそうであった。社会生活の現実では身分に対応したさまざまな不平等がまだ残っていたのに、「学制」(明治5年)における国民皆学という理念のもと子どもたちは小学校に登校した。その小学校という教育の場においては、基本的に身分ではなく学習の進度と等級が支配的であった。学級の編成、座席あるいは座列などは学習の進度と等級、あるいは年齢で決定されたのであった。こうした分相応でない序列や居

場所を日常的に体験することが続けば、平等意識が醸成され開かれた社会の形成が促進されるという大きな意味をもったはずである⁽³⁶⁾。

今、わが国では、学校はかつてほど平等化装置としての役割を期待されなくなったという調査結果がある⁽³⁷⁾。そうであるなら、教師になったら、学校あるいは学級がもつこのような平等の理念を育むという意義を念頭においた学級経営、あるいは児童生徒への支援をしてほしいものである。

(二)

「学校教育こそ最大の国家安全保障につながる」という観点から、学校に大きな期待がかけられている国もある。エジプトの場合がそうであって、今、日本式の学校教育を導入することで教育改革を進めようとしている。平成28(2016)年2月および3月に大統領が来日し、日本に教育分野での協力と指導を求めている。

エジプト社会では、目下解決すべき重要課題が二つある。チームワーク・道徳観・民主的思考を育成すること、および「知識偏重傾向の強いエジプトの子どもたちの考える力を育み、最終的には若者をイスラム過激思想から守る」ことである。その具体的な対処法として、日本の学校教育にみられる掃除や日直が着目され、それらを取り入れることで「愛国心やチームワークを教える」ことが構想されている⁽³⁸⁾。

日本の学校は、このところエジプトだけでなく新興国で注目を集めている。学校の制度や組織への関心というよりも、学校のソフト面が注目されている。そのなか、文部科学省

は他省とともに「日本型教育の海外展開官民協働プラットフォーム」(仮称)を設立し、平成29(2017)年度から、日本独特の学校教育の仕組みを新興国に「輸出」する取り組みを始めようと計画している。輸出されるのは「主にソフト面だ。クラス内で役割を分担する掃除や給食、集団で練習を重ねる運動会や部活動、防災訓練などは海外では珍しく、協調性などをはぐくむ手段として評価する新興国は少なくない」。動物の飼育、花壇の世話などについても、協力しあって課題に取り組む姿勢を醸成するという点で、高い評価を受けている。とくに教育システムが確立していない国から、注目を集めている⁽³⁹⁾。

このような日本型学校教育の新興国への輸出は、日本の学校の独自性が再認識されることにつながる。また、海外展開は国際貢献の一環として推進されるのだが、日本の学校を国際的な視点から見つめ直し、相対的に認識するきっかけになるだけに注目される。

4. むすび

「学校の意義」について論ずるには、いくつかの視点と事項が考えられる。①社会化、選抜と配分およびその正当化という学校の機能と役割、②家庭教育、社会教育、生涯教育と比較してみた学校教育の特質、③学校の誕生から普及、近代学校の制度化と変容、現代学校の現状と改革という歴史の変遷、などといった視点と事項である。これらを論ずることで、学校の意義について社会的、制度的、歴史的な説明をすることができる。

ただし、一般大学の教職課程の入門的な科

目として位置づけられる「教育原論」のなかで「学校の意義」をめぐって講義する場合、その内容はきりだけ幅広く興味深いトピックスを用意し、あまり専門的にならないように概説するのがふさわしいと考えられる。

筆者は、そのような考えから、日本だけでなく海外の、それも先進国だけでなく発展途上国の、現代だけでなく過去における学校とその意義をめぐり興味深い教材5点を用意し、学校はいつでもどこでも「意義」あるものであることを講義することに腐心した。本稿はその教材「学校の意義」をめぐって考察したものである。

日本ではいま学校への熱い期待は薄れ信頼性が低下しがちであるけれども、学校はいつでもどこでも「意義」あるものなのである。日本の学校、とりわけそのソフト面は新興国で注目され、輸出されようとしている。

[注]

- 1) 新村出編『広辞苑』岩波書店、2008、第6版、1118頁。
- 2) 長谷川町子『サザエさん』全68巻、姉妹社、1980-1983。
- 3) 樋口恵子『サザエさんからいじわるばあさんへ-女子どもの生活史-』ドメス出版、1994、95頁(朝日文庫、2016、92-93頁)。
- 4) 東京サザエさん学会編『磯野家の謎、おかわり』飛鳥新社、1993、64頁。
- 5) 同上。
- 6) 樋口恵子『サザエさんからいじわるばあさんへ-女子どもの生活史-』前出、98頁、114頁、117頁(朝日文庫、前出、95頁、112頁、114-115頁)。
- 7) 武富健治『鈴木先生』全11巻、双葉社、2011。
- 8) 坂本保富「美談『米百俵』の誕生とその真実-日本の教育近代化と『米百俵』の主人公・小林虎三郎の軌跡-」、信州大学全学教育機構教職教育部『教職研究』1、

- 2008、9-36頁、参照。
- 9) 山本有三・石井庄司編『小学国語』6-2、日本書籍、1965。
 - 10) 首相官邸「第百五十一回国会における小泉内閣総理大臣所信表明演説 平成十三年五月七日」(<http://www.kantei.go.jp/jp/koizumispeech/2001/0507syosin...>)
 - 11) 山本有三『米百俵』新潮文庫、2001。初版は、同『米百俵、隠れたる先覚者 小林虎三郎』新潮社、1943。
 - 12) 2001年歌舞伎座で上演。9月公演『米百俵』、主演は中村吉右衛門。
 - 13) 竹元正美『「米百俵」海を渡る』日之出出版、2004。Yamamoto, Y. (Keene, D. trans.), *One Hundred Sacks of Rice: a Stage Play*, Nagaoka City Kome Hyappyo Foundation, Nagaoka, c1998。「米百俵の精神 海を越え、ホンジュラスに学校建設、100校突破」『中日新聞』2017年3月3日、12頁。「ホンジュラスの『米百俵』を祝う、100校開校記念」『中日新聞』2017年3月5日、34頁、その他。
 - 14) 坂本保富「美談『米百俵』の誕生とその真実-日本の教育近代化と『米百俵』の主人公・小林虎三郎の軌跡-」前出。
 - 15) C. ヴァイニー (田中喜芳訳)『シャーロック・ホームズの見たロンドン-写真に記録された名探偵の世界』J I C C 出版局、1990、114頁 (河出書房新社、1997、106-107頁) より再引。
 - 16) 北政巳『近代スコットランド社会経済史研究』同文館、1985、277-288頁。
 - 17) 河村幹夫『コナン・ドイル-ホームズ・S F・心霊主義』(講談社、1991)の「9. ドイルと日本」参照。
 - 18) 水野雅士『シャーロッキアンへの道-登山口から五合目まで』青弓社、2001、55頁。江利川春雄『日本人は英語をどう学んできたか-英語教育の社会文化史-』研究社、2008、76頁。
 - 19) 磯辺弥一郎「安藤貫一氏を憶う」『英語青年』第53巻第1号、1925年4月、19頁。出来成訓「英文家 安藤貫一」、日本英学史学会『英学史研究』第10号、1977、107頁 (同『日本英語教育史考』東京法令出版、1994、394頁に再録)。
 - 20) 出来成訓「英文家 安藤貫一」同上。和田長丈「『我輩ハ猫デアル』を最初に英語訳した安藤貫一」『大学図書館問題研究会誌』第26号、2004年6月、51-59頁。
 - 高橋智朗「安藤貫一とジェローム」、立正大学英文学会編『英文学論考』第1輯、1957、41-43頁。
 - 21) 安藤貫一「コナン・ドイル先生を訪ふ」『英語青年』第25巻第1号 (1911年4月1日) 20-21頁、第25巻第2号 (1911年4月15日) 45頁、第25巻第3号 (1911年5月1日) 68-69頁、第25巻第4号 (1911年5月15日) 93-94頁。
 - 22) 植村昌夫『シャーロック・ホームズの愉しみ方』平凡社、2011、208頁。河村幹夫『コナン・ドイル-ホームズ・S F・心霊主義』前出、201頁、197頁。
 - 23) A. C. ドイル (笹野史隆訳)『ガードルストーン商会』下、エミルオン、2006、170頁。
 - 24) A. C. ドイル (笹野史隆訳)「最後の事件」、同『空き家の冒険』下、エミルオン、2010、9頁。A. C. ドイル (日暮雅通訳)「空き家の冒険」、同『シャーロック・ホームズの生還』光文社文庫、2006、21頁。
 - 25) 佐貫浩『イギリスの教育改革と日本』高文研、2002、191頁ほか。
 - 26) 吉田多美子「イギリス教育改革の変遷-ナショナルカリキュラムを中心に-」『レファレンス』2006年11月号、99-112頁参照。
 - 27) 阿部菜穂子『イギリス「教育改革」の教訓-「教育の市場化」は子どものためにならない-』岩波書店、2007、岩波ブックレット No. 698。
 - 28) 藤森克彦「エコノミスト・レポート、『第3の道』の模索、トニー・ブレア繁栄と失墜の10年」『週刊エコノミスト』85巻31号、2007年6月12日、85-87頁参照。望田研吾「イギリス労働党ブレア政権の教育改革」、同『21世紀の教育改革と教育交流』東信堂、2010、所収。
 - 29) 「国連本部でのスピーチ」、マララ・ユスフザイ、クリスティーナ・ラム (金原瑞人・西田佳子訳)『わたしはマララ-教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女-』学研マーケティング、2013、418-424頁に所収。『CNN English Express』編集部編『[対訳] マララ・ユスフザイ 国連演説&インタビュー集』朝日出版社、2014、参照。
 - 30) 「マララさん ノーベル平和賞受賞演説」『中日新聞』2014年12月12日、7頁。「マララさん 平和賞受賞演説(要旨)」『朝日新聞』2014年12月11日、11頁。
 - 31) マララ・ユスフザイ、クリスティーナ・ラム (金原瑞人・西田佳子訳)『わたしはマララ-教育のために立ち上が

- り、タリバンに撃たれた少女ー』前出。マララ・ユスフザイ（道傳愛子訳）『マララ：教育のために立ち上がり、世界を変えた少女』岩崎書店、2014。
- 32) 「マララさん ノーベル平和賞受賞演説」前出より作成。
- 33) 「注目話題・著名人も登場、マララさん・東京五輪・羽生選手」『日本経済新聞』2015年4月7日、35頁。「『マララさん』幅広く登場」『毎日新聞』2015年4月7日、23頁。
- 34) 「マララさん 平和賞受賞演説（要旨）」前出。「国連本部でのスピーチ」前出。
- 35) 「マララ・ユスフザイに関する名言集・格言集」（meigen.keiziban-jp.com/malalaより）。
- 36) 高木靖文「学習環境の伝統知」、梶田正巳編『授業の知、学校と大学の教育革新』有斐閣、2004、所収、参照。
- 37) 『学校教育に対する保護者の意識調査：ダイジェスト：Benesse 教育研究開発センター・朝日新聞社共同調査2012』ベネッセコーポレーション Benesse 教育研究開発センター、2013、参照。
- 38) 「エジプトが日本教育導入、小学校で掃除、日直」『中日新聞』2016年4月6日（夕）2頁。
- 39) 「『日本式教育』輸出します－文科省、来年度に新組織」『日本経済新聞』2015年9月16日、42頁。
-
- 本稿の構成について、藤井基貴先生（静岡大学准教授）より有益なご教示を得た。記して多謝する。

